P－28　口腔保健科の長期メインテナンス・SPT患者への自己効力感の調査

○浪花　真子[1]、庄野　幸音[1]、中村　太志[2]、中島　啓介[2]、吉野　賢一[1]、久保田浩三[1]
[1]九歯大・学際教育、[2]九歯大・歯周病学

メインテナンス・SPT治療は、再発の危険性が高い歯周病において非常に重要な治療であるが、長期間継続して受診する患者とそうでない患者がいる。

過去に長期メインテナンス・SPTに応じる患者の主観的な資質を知るためにアンケートを行ったが、今回客観的な資質を知るために自己効力感の強度を測定することにした。自己効力感を測定することで患者に合わせた心理教育的指導が行え、行動変容を促すことで、良好な予後が期待できると考えられる。そこで自己効力感の調査と患者バックグラウンドとの比較検討を行った。

対象者は口腔保健科にメインテナンス・SPT治療のため通院を続けている患者137名(男性48名、女性89名、平均年齢69.1±10.6歳)とした。来院時に研究の趣旨を説明し同意を得た。自己効力感を客観的に測定する方法として、角館ら[1)]が開発した自己効力感測定尺度「SESS(Self-Efficacy Scale for Self-care)」を用いた。PCR値(Plaque Control Record)、年齢、現在歯数、通院歴の記録を行い、SESSと口腔関連QOLアセスメント(Oral Health-Related Quality of Life：OHRQL)を採取した。

角館ら[1)]の初診群、メインテナンス群と口腔保健科の長期メインテナンス・SPT患者群との比較では、口腔保健科の長期メインテナンス・SPT患者群の方が、SESSが高かった。自己効力感とPCR値、通院歴、年齢、現在歯数との比較では、PCR値が低いほどSESSが高かった。また、通院歴が長いほどSESSが高かった。

長期メインテナンス・SPT患者群は自己効力感が高く、自己効力感が高いほど長期メインテナンス・SPTに応じる可能性が高いと思われる。

参考文献１)角館直樹ら：歯周病患者のセルフケアに対する自己効力感測定尺度の開発―信頼性と妥当性の検討―　日歯周誌.2007；49：285～295.

P－29　NEO-FFIによる性格特性と就職先の関係

○園木　一男[1]、高橋由希子[2]、中道　敦子[2]、秋房　住郎[2]、日高　勝美[1]
[1]九歯大・学際教育、[2]九歯大・多職種連携

口腔保健学科は歯科衛生士を養成する学科として平成22年に新設され、平成26年から28年までに３期生までが卒業した。就職先は主に歯科医院や病院歯科であるが、歯科関連企業や地方公務員、社会福祉協議会、社会保険診療報酬支援基金などの公的機関にも就職しており、また大学院への進学など多様である。これらの学生は１年生時に行われた口腔健診において自記式性格特性検査であるNEO-FFI(Neuroticism Extraversion Openness Five-Factor Inventory)を受けている。NEO-FFIはNeuroticism(神経症傾向：N)、Extraversion(外向性：E)、Openness(開放性：O)、Agreeableness(調和性：A)、Conscientiousness(誠実性：C)の５つの性格特性をスコア化できる。そこで、どういう性格の学生がどういう進路を選択しているのかを検討するため、性格特性と就職先との関連を解析した。

対象は３期までの卒業生73名(女性72名、男性１名)。

就職先の内訳は、歯科医院33名、病院歯科25名、歯科関連企業６名、公的機関４名、大学院５名であった。就職先によってN、E、O、Aの各平均スコアに差はなかったが、Cの平均スコアは企業に就職した学生が最も高く(58.0)、企業、大学院(57.6)、歯科医院(54.4)に就職した学生は最も低かった病院歯科に就職した学生(48.8)より有意に高かった。

Cスコアの判定は45～55が平均レベル、56以上が高いレベルとされるので、誠実性が高い学生は企業や大学院を選んでいると解釈された。